

川崎市委託事業報告調査研究及び普及啓発業務委託

「川崎市 川崎区・幸区の町名の移り変わり」

報告会テーマ

地名講座「川崎駅の西・東」

～変わる町と昔のしるべ～



2020年1月

報告 日本地名研究所

主催 川崎市

●本事業の趣旨・目的

川崎市の文化は、多様な地形や歴史を背景に育まれており、第2期川崎市文化芸術振興計画(改訂版)では、「地域資源を活用した特色ある文化芸術活動の推進」を施策の一つに掲げている。

地名は土地を識別するだけでなく、土地の由来やその地域に住んでいる人たちの関係や歴史を物語るものであり、生活や文化などについて伝えることができる貴重な文化財の一つと言える。

本事業は、市内の地名の由来を調査研究し後世に残していくとともに、研究成果を講座等の形で市民に還元することで、市民が地域への愛着と誇りを一層深めることを目的として実施するものである。

○調査研究内容

川崎区・幸区の川崎駅周辺の再開発や住居表示による町名と町の変化について調査研究及び研究成果を報告する講座(講演会とまち歩き)の開催を行う。

川崎市南部の川崎区・幸区は、大正13年(1924)の川崎市誕生以来密接な関係にあり、行政上の事業のみでなく、地域開発などにも同一步調で進められた部分が多く見られる。耕地整理や土地区画整理事業に伴う新町名成立もそのような流れの中で、成立したものが多く、川崎市域全体から見ると特徴と言える。

本調査研究においては、川崎区と幸区に跨る川崎駅周辺の再開発もひと段落した現在、再開発の経過を含め、川崎区臨海部、特に殿町地区の最先端技術集積地域や幸区新川崎駅周辺の町づくりなどを取上げて、歴史的経過や町名変更過程などをおとした、町の変化に着目した。

また、講座においては、旧川崎町の町名と字については複雑を極め、その解明に努め、今までも機会あるごとに説明し、資料提供も行ってきたが、市民の理解は不十分と思われる。今回の調査研究の成果として、川崎駅周辺の地番の複雑な訳を説明する中で、理解を深めるよう心掛ける。

○講演会

調査研究成果に関する講座を以下のとおり開催した。

【第1回】 日 時：令和元年12月7日(土) 13時半～16時

参加人数：37人

会 場：東海道かわさき宿交流館集会室

【第2回】 日 時：令和元年12月15日(日) 13時半～16時

参加人数：22人

会 場：ミューザ川崎シンフォニーホール 研修室

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

○まち歩き

調査研究成果に関するまち歩きを以下のとおり開催した。

【第1回】 日 時：令和元年12月14日(土) 13時半～15時半

参加人数：33人

場 所：川崎駅北口集合 川崎地区を歩く

【第2回】 日 時：令和元年12月22日(日) 13時半～16時

参加人数：34人

場 所：川崎駅北口集合 南河原地区を歩く

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

○今年度研究の成果

川崎駅周辺の町名の再編過程を明らかにし、西口にある町名は旧川崎町に関係する地域であったこと。具体的には堀川町や柳町であること。また、川崎駅東口のバスターミナル付近は逆に、南河原村の地域であったことなどを記述した。

そのような中で、西口再開発がほぼ完了した新しい町づくりについて報告する。

川崎区

- ・旧東海道筋の旧川崎町(久根崎町・新宿町・砂子町・小土呂町)とその周辺耕地との関係が複雑で、図で表して大凡の字名を見てもらい、各町にその実際を記述してある。可能な限りその由来も記している。
- ・工場進出に伴い、臨海部の発展が目覚ましく、人員輸送の問題がでてきた。川崎市として、道路整備計画や輸送手段などその変遷も市域の広がりとともに課題と考える。
- ・かつての工業都市川崎から、工場進出規制後の再開発。特にキングスカイフロント地区の再開発が川崎市の重要施策として取り上げられていることを記述した。

幸区

- ・横須賀線新川崎駅が昭和 55 年に開業してから 40 年が経過した。この間に新鶴見操車場跡地の活用について、様々な試みがなされてきた。鹿島田駅と新川崎駅の連絡通路の開設や K2 (ケイスクエア) タウンキャンパスでの市民開放講座、ショッピングセンターなどが設置されてきた。その中で、徐々に町が整備され、新塚越が平成 12 年、新川崎・新小倉が平成 19 年、東小倉が平成 20 年に起立している。いずれの町も鉄道線路に沿った細長い町となっている。
- ・川崎駅西口再開発が東芝堀川町工場跡地を中心に行われてきた。最も早く着手したのが明治製糖・明治製菓跡地にソリッドスクエア・産業振興会館などの先端産業人材育成を目的とした施設ができた。続いて旧国鉄川崎変電所跡地にミュージア川崎シンフォニーホールを開設し、西口のイメージを一変させた。ラゾーナ川崎プラザは総合商業施設として多くのテナントによって構成され、人々の動線が大きく変わった。念願の川崎駅北口改札口の設置により、アクセスがより便利になった。
- ・戸手と小向で字名の未採取な部分があり、その解明と境界の確定ができた。二ヶ領用水の水路に沿って村境・字境がされており、戸手村の飛地が小向村に存在していたことが判明し、前回の南河原村の字図を含めた幸区の字図を完成することができた。一部古市場村の字名が抜けていたので地図上に補正した。

その他、川崎区・幸区的具体については各町項に下線を引いて新たな内容や解釈などを示した。

目次

●本事業の趣旨・目的	・ ・ ・ ・	2
○今年度研究の成果	・ ・ ・ ・	3
川崎区	・ ・ ・ ・	5
川崎地区	・ ・ ・ ・	6
大師地区	・ ・ ・ ・	10
田島地区	・ ・ ・ ・	15
幸区	・ ・ ・ ・	21
南河原地区	・ ・ ・ ・	22
戸手地区	・ ・ ・ ・	23
小向地区	・ ・ ・ ・	24
古市場地区	・ ・ ・ ・	25
古川・塚越地区	・ ・ ・ ・	26
鹿島田・小倉地区	・ ・ ・ ・	26
加瀬地区	・ ・ ・ ・	28
まとめ	・ ・ ・ ・	30
講演会レジュメ	・ ・ ・ ・	31
町歩き資料	・ ・ ・ ・	38

川崎区を構成する地域は、明治 22 年の市町村制の施行により大きく 3 つにまとめられた。旧川崎町と堀之内村からなる川崎町。大師河原村と池上新田からなる大師河原村。大島村・中島村・渡田村・小田村からなる田島村である。それぞれには役場が設けられ、行政事務が執り行われたが、江戸時代からの地域的つながりから祭礼行事や物資調達など川崎町への依存が強い地域であった。

旧川崎町は江戸時代初期に東海道の宿駅に指定され、新しい町割りによって形成された。久根崎町・新宿町・砂子町・小土呂町からなり、周辺の耕地が附属されていた。このため、各町の飛地が旧川崎町内に散在し、その把握は容易ではない(川崎町全図・大正 8 年参照)。さらに、旧川崎町が堀之内村を割り込むように入っており、明治 22 年には堀之内村を含めた部分が川崎町となる。明治時代初期にできた字図には、各町村の記号が一筆ごとに記されている。

川崎駅周辺の土地取得に関する資料からも、明治 5 年の新駅開設にあたったいきさつを彷彿させる複雑な字名が川崎町と南河原村の字名から読み取れる。現在幸区堀川町や柳町は川崎町であったが、堀川町の鉄道より北側の部分は大正 13 年に、柳町は昭和 8 年に御幸地区に編入されている。

川崎市域が工業化するに伴い、市制への高まりが大正期に起こり、土地の譲渡などの問題から耕地整理がそれぞれの地域で行われるようになった。その結果、大正 11 年から 13 年にかけて川崎地区に新町名が施行され、その後昭和 11・12 年頃に大師地区・田島地区の多くに新町名が施行される。

戦災により川崎市域は市街地を中心に壊滅状態にあった。とくに川崎区域に被害が大きく、川崎市は復興土地区画整理地区に指定された。これに伴い新しい道路の新設と区画整理が実施された。新たに昭和 39 年～49 年頃にかけて川崎区域の町名が再度改正された。また合わせて多くの町で住居表示も施行された。

川崎区域は明治末から臨海部での埋立とそれに伴う工場の進出が目まぐるしい。大正期に入ると、工場に勤務する人々の住宅建設が盛んに行われ、大島地区や渡田地区などの寮や個人住宅が建設される。さらに、南武線沿線や東海道線沿線(京浜線)などから通ってくる工員が多数に及んだ。このことから、工員輸送に関係する道路や交通機関の整備が求められ、川崎駅から臨海部への道路整備が行われ、町の変化へとつながっている。

昭和 30 年代から工場操業に伴う公害問題が持ち上がり、川崎市に於いても規制基準の強化や建設基準の見直しが行われた。操業規制により、移転する企業も出て、その跡地の再利用など、新しい動きが見られた。その中で、臨海部にあったいすゞ自動車に移転してその跡地を川崎市ではキングスカイフロントと命名し、最先端技術集約の施設誘致に努めた。具体的には殿町 3 丁目地区である。国際線が就航する羽田空港に近接し、川崎市が先導して企業誘致を図り、研究機関や医療・検査機関、製薬・創薬、エネルギー、環境などの実験や流通拠点などとして活用している。

かわさき
【川崎地区】

みなとちょう
港町(昭和 47 年 8 月住居表示) 港町(昭和 12 年 12 月耕地整理)

東京府蒲田村八幡塚飛地向洲、久根崎字堤外耕地、堀之内村字蔵前耕地など。

明治 45 年に東京府と神奈川県境界を設定し、神奈川県となる。

大正 8 年に川崎河港水門として工事を行った。川崎運河計画の一環として進められ、昭和 3 年に水門が完成したが、運河建設が中止となり、水門部分のみ残った。この水門にちなみ港町とした。

すずきちょう
鈴木町(昭和 47 年 8 月住居表示) 鈴木町(昭和 12 年 12 月耕地整理)

東京府蒲田村八幡塚飛地向洲、久根崎字蔵後耕地など。

明治 45 年に東京府と神奈川県境界を設定し、神奈川県となる。

敷地のほとんどに味の素の工場が占め、大正 3 年に川崎に移転してくる。明治 41 年の創業時には鈴木製薬所、大正 6 年に鈴木商店、昭和 22 年に味の素株式会社と社名を変更している。社長の鈴木さんの名前をとって町名とした。

あさひちょう
旭町 1～2 丁目(昭和 47 年 8 月住居表示) 旭町 1 丁目(大正 13 年耕地整理)

旭町 2 丁目(昭和 3 年耕地整理)

久根崎字堤外耕地、寺後耕地、堀之内村字榎町耕地、蔵前耕地、中島字蒲原耕地など。

旧久根崎を中心に周辺の町が集合し新しい町を形成した。町の発展を願って旭町としたという。

ほんちょう
本町 1～2 丁目(昭和 39 年 11 月区画整理) 東 1～3 丁目(大正 13 年 6 月設定)

久根崎字宿裏耕地、新宿字宿裏耕地、砂子字東田耕地、堀之内字川下耕地など。

川崎町の東に位置付き、通称で東(ひがし)と呼び合っていたのではないかと。地元の古老は現在でも東(ひがし)と呼び、本町二丁目町会の一部に本町二丁目東町会がある。本町は新宿に下本陣があったところから本町と改称したという。

えきまえほんちょう
駅前本町(昭和 39 年 11 月区画整理) 堀川町(大正 13 年 6 月)

古川通(大正 13 年 6 月)

堀之内字川下耕地、砂子字古川通耕地、南河原字砂子下耕地など

川崎駅の東口の北側に位置する。堀之内村の川下耕地を堀川町と改称。旧多摩川の流路跡を古川といい、その流路に沿った地域を古川通とした。その一部にあたる。

^{いさご}
砂子1～2丁目(昭和 39 年 11 月区画整理) 砂子 1～2 丁目(大正 13 年 6 月設定)

砂子字東田耕地、古川通耕地など

砂子の町名の由来は、この付近が海の渚線にあったことによる。江戸初期に東海道を設定するころはまだ湿地の状態であったという。東海道川崎宿の中心として問屋場や助郷会所がおかれた。

^{ひがしだちょう}
東田町(昭和 39 年 11 月区画整理) 東田町(昭和 11 年 9 月設定)

東田(大正 11 年 12 月耕地整理)

砂子字東田耕地、堀之内字宮前耕地など

砂子の東に位置し比較的田などの耕地に適していた地域であったところからの地名と考える。当初は東海道筋に面していたが、区画整理により東に移動し国道 15 号線に接する旧宮前町を含むエリアにあたる。

^{しんかわどおり}
新川通(昭和 47 年 8 月住居表示) 新川通(大正 11 年 12 月耕地整理)

砂子字古屋敷耕地、新宿字古屋敷耕地など。

古屋敷耕地がほぼそのまま新川通となった。通称古屋敷と呼ばれる屋敷があったという。大正 8 年から新川が暗渠になり、耕地整理が終了するに伴い、新川沿いの地域が新川通となった。

^{ほりのうちちょう}
堀之内町(昭和 39 年 11 月区画整理) 堀之内(大正 11 年 12 月設定)

堀之内字上宅地など。

堀之内村は大きく川崎町の北側一帯におよんだと思われる。江戸時代初期に東海道が五大往還の一つに指定され、宿場として川崎宿が設けられるのが元和 9 年(1623 年)のことである。

初め久根崎町と砂子町が宿場として開かれ、寛永 4 年(1627 年)に新宿町と小土呂町が加えられたとある。このことは、新宿町は元々は堀之内村であったことを物語っている。なぜならば、その北西に堀之内村字川下耕地や南河原耕地が地続きになっているからである。

大正 11 年に周辺に新しい町名を設定する中で、小さく堀之内(ほりのうち)として残った地域である。堀之内の町名は、東海道筋にある曹洞宗三寺や稲毛神社(山王社)付近に館城があったと考えられ、その周囲を堀が廻らされていたところからの地名と考える。

^{みやもとちょう}
宮本町(昭和 39 年 11 月区画整理) 宮本町(大正 13 年 6 月設定)

堀之内字下宅地など。

宮本町は稲毛神社の地にあり、まさに宮本ということである。川崎市役所本庁舎(再建中)があり、川崎市の中心といえる場所にある。

みやまえちょう

宮前町(昭和 47 年 8 月住居表示) 宮前町(昭和 11 年 9 月設定) 宮前(大正 11 年 9 月設定)

堀之内字宮前耕地、字下蒲原耕地など。

宮前町は稲毛神社の参道の前に位置付くところからの町名。国道 15 号線により町が二分割になる。昭和 47 年の住居表示により、国道から東を境とし榎町の一部を町域とする。

えのきちょう

榎町(昭和 47 年 8 月住居表示) 榎町(大正 11 年 12 月設定)

堀之内字下蒲原耕地など。

榎町は町内にある榎の伝説に由来。堀之内村と中島村の境に位置し、両方に蒲原(カンバラ・カバラ)の地名があり、植物の蒲(カバ)が生い茂る地であった。

ふじみ

富士見 1~2 丁目(昭和 47 年 8 月住居表示) 富士見町(昭和 3 年設定)

富士見公園(昭和 14 年設定)

堀之内字下蒲原耕地、中島字富士見耕地、蒲原耕地など。

古くより蒲原耕地の一部を富士見と呼んでいた。明治には川崎競馬場ができ、その跡地に富士瓦斯紡績工場が誘致される。戦後は競輪場・競馬場としてまた富士見公園として整備された。

さかいちょう

境町(昭和 47 年 8 月住居表示) 境町(大正 11 年 12 月耕地整理)

新宿字東越耕地、砂子字東越耕地、堀之内村飛地、中島村飛地、大島村飛地など。

境町(さかいまち)は名前の通り、川崎町と田島村大字大島・渡田との境界にあり、主要な村道が通っていた。字の東越(トウノコシ)は峠などの村境に付く地名である。川崎市の町名呼称はサカイマチであったが、住民は古くからサカイチョウと呼ぶ人が多く、川崎市に呼称の変更を陳情して市議会の決議をもって、令和元年 8 月 1 日から境町(さかいちょう)と呼称が変更された。

おがわちょう

小川町(昭和 39 年 11 月区画整理) 小川町(大正 13 年 6 月耕地整理)

砂子字古川通など。

旧多摩川の流路に沿って古川(悪水路)が流れていた。一方、二ヶ領用水が小川町から小土呂橋近くを懸樋で流れており、小川町はその流れを指すと思われる。古川通の一部が小川町

となる。古川が暗渠となり、その両側に映画館街が形成された。現在は複合商業施設のラ・チッタデッラがある。

みなみまち

南町(昭和 39 年 11 月区画整理) 南町(大正 11 年 12 月耕地整理)

見染(大正 11 年 12 月耕地整理)

新宿字元木耕地など。

元木耕地の一部が大正 11 年の耕地整理で新町名として付けたもの。川崎町の南に位置付くところからの町名。明治 34 年頃東海道沿いにあった貸座敷業をこの地に移し町が開けた。昭和 39 年に見染の一部を編入し、新しい南町となった。

にしんちょう

日進町(昭和 39 年 11 月区画整理) 見染(大正 11 年 12 月耕地整理)

上並木(大正 13 年 6 月耕地整理)

古川通(大正 13 年 6 月耕地整理)

小土呂字見染耕地、古川通耕地、新宿字見染耕地、古川通耕地、元木耕地、砂子字古川通耕地など。

日進町は昭和 39 年に見染と上並木、及び古川通の一部から新設された。平成 4 年 7 月に古川通が日進町に編入され、古川通も消滅した。日進町の町名は日に向かって進むという希望や願いが込められている。旧町名の見染(みそめ)は古くは溝目とも呼ばれ、水路が地域に細かく廻らされていたことによる。上並木(かみなみき)は小土呂口から市場までを「八丁畷(はっちょうなわて)」といい、真直ぐな道には杉や松などの木が植えられ並木となっていたところからの町名。古川通(ふるかわどおり)は旧多摩川流路に古川が流れていたことによる。

もとぎ

元木1~2 丁目(昭和 45 年 7 月住居表示) 元木(大正 11 年 12 月耕地整理)

砂子字元木耕地、貝塚耕地、新宿字元木耕地、貝塚耕地、小戸呂字元木耕地、貝塚耕地など。

渡田村にも本木耕地があり、地続きの一带の地名。元木(もとぎ)には元木稲荷があり、そこに大きな木が立ち目印になっていたという。川崎宿の入口に位置しており、傍示杵(棒鼻)のことかもしれない。住居表示実施により貝塚の一部を編入する。

かいづか

貝塚1~2 丁目(昭和 45 年 7 月住居表示) 貝塚(大正 11 年 12 月耕地整理)

小土呂字貝塚耕地、砂子字貝塚耕地、新宿字貝塚耕地など。

貝塚は地域一帯に貝殻が多く出土したところから貝塚と呼ばれていた。この付近は海岸の渚線にあたり、波によって貝が打ち上げられてマウンド状になったもの。渡田に隣接し川崎駅方面の主要な道が通り町が早くから開けた。

^{つみね}
堤根(大正 13 年 6 月耕地整理)

小土呂字堤根耕地、西原耕地

堤根は旧多摩川の自然堤防のこと。堤根耕地は広く、半分が下並木となり、さらに堤根の一部が日進町に編入され、堤根の形状を捉えることができない。南武線が川崎駅に向うカーブが古川（二ヶ領用水）の流路跡で、現在堤根清掃処理センターのある一隅が西原耕地と呼ばれていたところである。

^{しもなみき}
下並木(大正 13 年 6 月耕地整理)

小土呂字堤根耕地

東海道沿いにあり、街道に並木が植えられていたため、下並木の町名となる。もとは堤根耕地の一部。南部は横浜市鶴見区市場上町に接し、二ヶ領用水の町田堀（小田村用水）が流れていた。現在、夫婦橋の説明板が境界に設置されている。

^{いけだ}
池田1～2 丁目(昭和 40 年 7 月住居表示) 池田町(大正 13 年 6 月耕地整理)

小土呂字池田耕地

旧東海道に面しており、小田村と渡田村に接している。二ヶ領用水の小田堀が通り湿田地帯であったところから、池田(いけだ)といわれた。一部が京町に編入された。

^{だいし}
【大師地区】

^{なかぜ}
中瀬1～3 丁目(昭和 40 年 7 月及び 47 年 8 月住居表示) 中瀬町 1 丁目(昭和 12 年耕地整理)

中瀬町 2～3 丁目(昭和 11 年耕地整理)

川中島字中瀬耕地、上河原耕地

川中島の北に位置し、川の中州が耕地化されたことによる地名で、中瀬(なかぜ)と読む。新堤防が昭和 7 年に築かれ、上河原耕地の半分が河川敷になってしまった。

^{かわなかしま}
川中島 1～2 丁目(昭和 40 年 7 月住居表示) 大師川中島町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地

多摩川の流路が分流して村の北と南を流れていた時代があったことによる地名。大師町の中心の微高地にあったことによる名称が川中島である。村の鎮守神明神社がある。

^{だいしえきまえ}
大師駅前1～2 丁目(昭和 40 年 7 月及び 47 年 8 月住居表示)

大師中町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

大師西町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地、大師河原字西耕地

川崎大師平間寺(へいけんじ)を中心に耕地名が付けられ、中心が川中島でその西に位置するのが西耕地である。大師の駅前が整備され、大師駅前として再整備された。駅前が川崎大師の表参道に位置付く。

だいしほんちょう

大師本町(昭和 40 年 7 月住居表示) 大師本町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地、中瀬耕地

川崎大師表参道の北側の地域を大師本町とした。天台宗明長寺がある。

だいしまち

大師町(昭和 40 年 7 月住居表示) 大師町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地

川崎大師平間寺を中心とした地域。大師町と呼び、参道を仲見世がある。

だいしこうえん

大師公園(昭和 40 年 7 月住居表示) 大師町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地、大師河原字台耕地

住居表示実施の前までは大師町として川崎大師平間寺と一帯であったが、大師公園を整備して独立した地域とした。昭和 56 年に中国・瀋陽市と川崎市が姉妹都市の盟約を交わす。その記念に瀋陽市から送られたものを「瀋秀園」として昭和 62 年に整備する。

ひがしもんぜん

東門前1～3丁目(昭和 40 年 7 月及び昭和 49 年住居表示)

東門前 1～3 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

川中島字川中島耕地、中瀬耕地、大師河原字北東耕地、南東耕地

川崎大師平間寺の東門に位置し、北東(きたひがし)耕地と南東(みなみひがし)耕地にあるところから、町名を東門前とした。羽田に通じる「羽田道」が南北に通る。

だいしがわら

大師河原(大正 13 年設定)

稲荷新田字田町耕地

川崎市が誕生し、川崎市大師となるが、その一年前に大師河原村が大師町となった。大正 13 年に大字となった大師(大師河原)が、周辺の地域に町名が付けられる中、田町耕地に大師河原(だいしがわら)として残っている。

だいしがわら

大師河原1～2丁目(昭和49年10月住居表示) 大師河原(大正13年設定)

稲荷新田字上殿町耕地、中瀬耕地、田町耕地、

大正13年に川崎市が誕生し、大字大師河原となった。上殿町耕地は多摩川に面していたところから、住居表示実施に際し大師河原1～2丁目とした。工場跡地にはマンション群が林立している。

ふじさき

藤崎1～4丁目(昭和47年8月住居表示) 藤崎町1～3丁目(昭和9年7月耕地整理)

藤崎3～4丁目(昭和40年7月設定)

大師河原字藤崎耕地

観音川(六百代川)の上流部、二ヶ領用水の排水路(悪水路)が地域の西を流れていた。藤崎はこの場所から富士山がよく見えたところからの命名と言われているが、実は7万年前に蒲田の呑川(のみかわ)の流路が観音川の流路にあたり、東京湾に注がれていた。その後、呑川の流路が変わり、また多摩川の流路も北に移動するが、藤崎は川の淵(ふち)、崎は前(さき)と考えることもできる。

かんのん

観音1～2丁目(昭和47年8月住居表示) 観音1～2丁目(昭和40年7月設定)

観音町1～2丁目(昭和9年7月耕地整理)

大師河原字遠藤野耕地

観音川の北に位置し、町内に石観音を祀る観音堂に由来する。遠藤野(えんどうの)耕地の地名は、川崎大師平間寺を中心にして、トーノ(遠野)の位置にあったことによる地名か。

だいまち

台町(昭和40年7月住居表示) 台町(昭和11年3月耕地整理)

大師河原字台耕地

台町の南を羽田道が通り、周辺の地域よりいくらか高い微高地となっているところからの町名。

しょうわ

昭和1～2丁目(昭和49年10月住居表示) 昭和1～2丁目(昭和40年7月区画整理)

昭和町1～2丁目(昭和11年3月耕地整理)

大師河原字北東耕地、南東耕地、稲荷新田字出来野耕地

もとは北東耕地、南東耕地であったが、耕地整理で新町名を付けるにあたり、年号の昭和を選んだ。全国各地にある町名である。

できの

出来野(昭和49年10月住居表示) 大師河原(大正13年設定)

稲荷新田字出来野耕地

出来野は稲荷新田を開発する中で、江川周辺の開発で出来た土地の名前といわれている。出来野耕地はかなり広い地域であったが分割され、東門前から産業道路までの地域となった。

^{ひの}日ノ出^で1~2丁目(昭和40年10月住居表示) 日ノ出町(昭和11年3月耕地整理)

稲荷新田字出来野耕地、塩浜耕地、池上新田字鷹取下

出来野耕地の産業道路から東側に出来た町名で、海に面したところから日ノ出としたといわれている。日ノ出の地名も全国に多い。

^{たまち}田町1~3丁目(昭和40年10月及び昭和44年3月住居表示)

田町3丁目(昭和40年10月設定)

大師河原(大正13年設定)

稲荷新田字田町耕地、江川町耕地、下殿町耕地、小島新田

田町耕地の字を継承した田町。稲荷新田の中でも耕地として整備された地域であったところか。上田町と下田町がある。江川町耕地の一部を編入する。

^{えがわ}江川1~2丁目(昭和40年10月住居表示) 大師河原(大正13年設定)

稲荷新田字江川町耕地、田町耕地

江川は排水路(悪水路)のことで、二ヶ領用水の末端に位置している。元は江川に沿って広い地域であったが、住居表示により小さくまとまってしまった。

^{よつやかみちよう}四谷上町(昭和49年10月住居表示) 四谷上町(昭和11年3月耕地整理)

稲荷新田字四谷耕地

四谷上町。四谷は四ツ屋(四家)ともいわれ、開発当初は四軒の農家しか住んでいなかったといわれている。上町と下町が古くからあった。産業道路を挟んで西側が四谷上町になる。町の中央の四谷町内会館の敷地内にある義田稲荷がこの地域の開墾の苦しさを物語る。

^{よつやしもちよう}四谷下町(昭和41年7月住居表示) 四谷下町(昭和11年3月耕地整理)

稲荷新田字四谷耕地

四谷下町。四谷は四ツ屋(四家)ともいわれ、開発当初は四軒の農家しか住んでいなかったといわれている。上町と下町が古くからあった。産業道路の東側が四谷下町になる。県立大師高校のあたりを「中塩場」と呼ばれ、このあたりから塩浜にかけて塩田が広がっていた。

^{とのまち}
殿町1～3丁目(昭和40年10月及び昭和44年3月住居表示)

殿町3丁目(昭和40年10月設定) 大師河原(大正13年設定)

大師河原字上殿町、下殿町耕地、下河原耕地、小島新田、三本葎、鈴木新田字中州

殿町の地名は、大師河原村・稲荷新田村を治めていた武将の館があったといわれている。しかし、川崎大師平間寺を中心にして、「遠い野」と考えることもできる。東半分(殿町3丁目)にいすゞ自動車川崎工場とテストコースがあった。その跡地に現在はキングスカイフロント地域として、整備されている。

^{こじまちょう}
小島町(昭和44年3月住居表示) 大師河原(大正13年設定)

大師河原字小島新田、池上新田字新開場、南新田、北新田

小島新田(こじましんでん)は六稲荷新田の名主小島六郎左衛門が開拓した新田。大半が日本冶金工業の工場地となる。

^{やこう}
夜光1～3丁目(昭和42年10月住居表示)

大師河原村夜光新田、和泉新田、小島新田

川島勘左衛門・富右衛門が埋立造成した夜光新田、和泉氏が造成した和泉新田からなる。昭和12年～昭和35年の埋立事業により完成する。夜光の地名の由来は、川崎大師平間寺の縁起にある、大師河原の夜光の海から弘法大師の尊像を引き上げたことにある。現在は日本ゼオンや旭化成、JXTG エネルギー、大同特殊鋼などの工場敷地と夜光3丁目には入江崎水処理センターがある。

^{しおはま}
塩浜1～4丁目(昭和41年3月及び昭和42年10月住居表示)

塩浜町(昭和11年3月設定)

池上新田(大正13年設定)

稲荷新田字塩浜耕地、出来野耕地、池上新田字再開浜、鷹取下、新開場

江戸初期に東京湾周辺に塩造りが奨励され、この地でも塩造りが行われた。明治の専売制が実施されるまで塩造りが行われた。神明神社境内に塩竈神社がある。

塩浜3丁目には入江崎水処理センターや入江崎総合スラッジセンターがある。

^{いけがみちょう}
池上町(昭和42年10月住居表示) 桜本町3丁目(昭和13年4月耕地整理)

池上新田(大正13年設定)

大島字堤外耕地、池上新田字入江ヶ崎耕地、中留耕地、夜光

産業道路から埋立地にかけて形成された町が池上町。当初は桜本 3 丁目とあったが、住居表示の際、池上新田を含むところから、池上町とした。

いけがみしんちょう
池上新町 1~3 丁目(昭和 42 年 7 月及び 10 月) 池上新田(大正 13 年設定)

池上新田字中留耕地、拝領地、上冥加耕地、天堤外、地堤外、人堤外、塩留耕地、中浜耕地、下冥加耕地、大島字堤外

池上新田(いけがみしんでん)の主要な地に起立した。稲荷新田及び大島村の地先を徐々に陸地化して完成させた。池上氏が川中島村と大師河原村の農民を動員して切り開いた地。

みづえちちょう
水江町(昭和 49 年 2 月住居表示) 水江町(昭和 16 年 12 月公有水面埋立地)

池上新田字入江ヶ崎、入江ヶ崎地先の海面埋立

旧名の入江を水江に読みかえて命名する。四面が海に囲まれた島ということも「水」の名を用いた一因と考える。東亜石油京浜製油所や JFE スチール東日本製鉄所、川崎ゼロ・エミッション工業団地がある。

ちどりちょう
千鳥町(昭和 49 年 2 月住居表示) 千鳥町(昭和 28 年 1 月公有水面埋立地)

大師河原村夜光地先の寄洲を埋立

この地は千鳥の群れる寄洲であり、それを埋め立てた土地なので千鳥町とした。川崎税関支所や東京電力川崎火力発電所などがあり、川崎港海底トンネルで東扇島に通じている。

うきしまちょう
浮島町(昭和 40 年 2 月住居表示) 浮島町(昭和 36 年 4 月公有水面埋立地)

末広島(昭和 36 年 4 月公有水面埋立地)

多摩川河口の浮洲を埋立

江戸後期に出来た末広島が末広町。その東側を埋立浮島町となり、両町を併せて浮島町となった。東芝浜川崎工場や東洋製罐、JXTG エネルギー浮島事業所がある。東京湾アクアラインの川崎浮島 JCT があり交通の結節点でもある。

たじま
【田島地区】

いせちょう
伊勢町(昭和 47 年 8 月住居表示) 伊勢町(昭和 3 年 5 月耕地整理)

中島字蒲原耕地、大師河原字西耕地、藤崎耕地

伊勢町は中島村がその大部分である。地域に伊勢社があったことによる町名。住居表示実施に伴い大師河原の一部を編入した。

なかじま

中島1～3丁目(昭和47年8月住居表示) 中島町1～2丁目(昭和14年3月耕地整理)

中島字蟹田耕地、蒲原耕地、富士見耕地、八幡下耕地、大師河原字藤崎耕地、大島字居村耕地

中島村は堀之内村と大島村に挟まれた位置にあり、村の東側を観音川(悪水路)が流れていた。住居表示実施により藤崎と大島の一部を編入。

おおしま

大島1～5丁目(昭和47年8月住居表示) 大島町3～5丁目(昭和13年4月耕地整理)

大島字向耕地、居村耕地、

住居表示が実施され、大島1丁目は遠野越(とおのこし)耕地とも呼ばれ、境町と地続きの地域である。2丁目は村の中心で居村通りと呼ばれた。3丁目は樋の口(ひのくち)と呼ばれ新川堀に面している。4丁目は向耕地を中心とした地域。5丁目は四ツ角から大師に通じる道に面した地域。

おいわけちょう

追分町(昭和48年3月住居表示) 大島町2丁目(昭和13年4月耕地整理)

大島字南耕地

大島五差路に近く大島村と渡田村の境界で追分と呼ばれていた地域。

おおしまかみちょう

大島上町(昭和45年7月住居表示) 大島町1丁目(昭和11年3月耕地整理)

大島字西前耕地、南耕地、渡田字宮前耕地、宮下耕地の飛地

大島上町は新川堀を境にして渡田寄りに位置付く。西前耕地に渡田の飛地が複雑に入り組んでいた。

さくらもと

桜本1～2丁目(昭和48年3月住居表示) 桜本町1～2丁目(昭和13年4月耕地整理)

大島字桜本耕地、堤外耕地

四ツ角から大師に通じる道の東に位置付く。古くは波打ち際にあったところを埋立てできた地域。町名は村に桜の木があったからという。新川堀沿いに桜が植えられ桜川(桜堀)と呼ばれていたからともいう。

はまちょう

浜町1～4丁目(昭和48年3月住居表示) 浜町1～4丁目(昭和13年4月耕地整理)

大島字稻荷新田、南耕地、渡田字東耕地、森山下耕地、稻荷耕地、若房耕地

大島塩浜と呼ばれた地域で、大師の塩浜と区別するために浜町とした。新川通を挟んで浜町1～2丁目(旧渡田)と浜町3～4丁目(旧大島)となる。この一帯は大島塩浜とも呼ばれ、大師河原の塩浜と区別するため、浜町にしたといわれる。

あさのちょう
浅野町(昭和48年3月住居表示) 浅野町(昭和13年4月耕地整理)

大島字新開場、桜本耕地、

江戸時代に大島村地先の寄洲であったが、明治33年に埋立許可があり青木新田といった。明治44年に浅野セメントに譲渡され、大正6年に造成が完成し大島字新開場となった。昭和13年に大島字新開場と桜本の一部が浅野町となる。さらに、昭和48年の住居表示実施に伴い浜町3～4丁目と南渡田町の一部を編入した。浅野町の町名は開発者の浅野総一郎の名前を付ける。

わたりだ
渡田1～4丁目(昭和45年7月住居表示) 渡田町1～3丁目(昭和11年3月耕地整理)

渡田字宮下耕地、宮前耕地、大島飛地字南耕地、新宿飛地字池田耕地

県道扇町川崎停車場線と市道南幸町渡田線に挟まれた地域で、成就院や新田神社があり、旧渡田村の中心にあたる。渡田の地名は、新田義貞の御家人・亘新左衛門早勝の領地であったことから、かつては亘田村と書かれた。

わたりだむかいちょう
渡田向町(昭和45年7月住居表示) 渡田向町(昭和11年3月耕地整理)

渡田字向耕地、本木耕地、宮下耕地

川崎町と接するところから向(むかい)と呼ばれた。市電通りと呼ばれる市道南幸町渡田線に面している。通称地名に田向図子(たむかいずし)があることから、夕(処)向とも考えられる。

わたりだしんちょう
渡田新町1～3丁目(昭和45年7月住居表示) 渡田新町1～2丁目(昭和11年3月耕地整理)

渡田字山王耕地、本木耕地、神田耕地

渡田新町は渡田山王町と渡田向町の上に位置し、本町に対応する町として新町とした。地域の中を南武支線の浜川崎線が、また昭和18年に新たに市電を通すために道路が建設され、市電通り(市道南幸町渡田線)が通る。

わたりださんのうちょう
渡田山王町(昭和45年7月住居表示) 渡田山王町(昭和11年3月耕地整理)

渡田字山王耕地、小田字西耕地

渡田山王町は、山王耕地と小田字西耕地の一部にあたる。県立川崎高校の付近に山王社(日枝神社)があったことに由来する。その後、小田に移転したと思われるがその詳細が伝えられていない。元々小田にも日枝神社があり合祀されたとも考えられる。

わたりだひがしちょう

渡田東町(昭和 45 年 7 月住居表示) 東渡田 1 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

渡田字宮前耕地、大島字南耕地

渡田東町は通称田尻(たじり)と呼ばれ、旧多摩川の流れの天飛川(てんぴがわ)のはずれ(尻)に位置していたことによる。東渡田 1 丁目と渡田 2～3 丁目、小田栄町 1 丁目の一部にあたる。

こうかんどおり

鋼管通 1～5 丁目(昭和 48 年 3 月住居表示) 鋼管通 1～3 丁目(昭和 13 年 4 月耕地整理)

東渡田 3～5 丁目(昭和 11 年 3 月設定)

渡田字若房耕地、森山耕地、森山下耕地、稲荷耕地、東耕地、大島字南耕地

大正 2 年から渡田字若尾新田(南渡田町)で操業を始めた日本鋼管への通勤道路として鋼管新道が建設された。川崎区役所田島支所や日本鋼管病院などがあり、臨海部の核となる地域である。

たじまちょう

田島町(昭和 48 年 3 月住居表示) 東渡田 2 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

渡田字宮前耕地、若房耕地

田島町の前身は、明治 22 年に渡田村・小田村と大島村・中島村が合併した田島村のなっことに由来する。村名は両方の村の名を一字ずつ採った合成地名である。昭和 2 年に田島村は川崎市に編入され、田島の村名は消滅した。昭和 48 年に住居表示が実施されるに伴い、住民の要望などもあり田島の町名が復活した。渡田小学校が町内にある。

みなみわたりだちょう

南渡田町(昭和 48 年 3 月住居表示) 南渡田町(昭和 13 年 4 月公有水面埋立地)

渡田字若尾新田、稲荷耕地

南渡田町は日本鋼管の工場用地であった若尾新田にあたる。開拓される前は渡田年番新田という干拓地であったが、日本鋼管の会社発起人の一人である若尾幾造が土地を提供して工場用地として埋立られた。JFE スチール東日本製鉄所の工場敷地が大半を占める。

おださかえ

小田栄 1～2 丁目(昭和 45 年 7 月及び昭和 48 年 3 月住居表示)

小田栄町 1～2 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

小田字東耕地、七反田耕地、竹ノ下耕地、渡田字神田耕地、菅沢字道下耕地

小田栄は小名に野際(のぎわ)、七反田耕地と呼ばれたところで、生産性の低い土地であったようだ。栄(さかえ)は境(さかえ)で、小田村と渡田村の境に位置付いたところの意味で、町が栄えることを願って付けた。全国にある「栄」地名の大半が境界に位置していることを知る一例である。平成 28 年に南武支線「小田栄駅」が開設された。

^{おだ}
小田1～7丁目(昭和 39 年 11 月住居表示) 西小田町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

東小田町(昭和 11 年 3 月耕地整理)

南小田町 1～2 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

小田町 1～2 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

小田字西耕地、北田耕地、南耕地、東耕地、前沼耕地、田中耕地、原耕地、竹ノ下耕地、田辺新田東番

小田は一般に湿田のこととされているが、御田(おだ)でもある。村内を二ヶ領用水町田堀の分水小田村用水が流れており、上流から下流にかけて幾つにも枝分かれして村内に行きわたっていた。前沼耕地付近は湿田で田舟を使って苗を植えたり、収穫作業を行ったりしたことが伝えられている。

^{きょうまち}
京町1～3丁目(昭和 39 年 11 月及び昭和 40 年 7 月住居表示)

京町 1～2 丁目(大正 15 年 11 月耕地整理)

小田字甲一西耕地、前沼耕地、田中耕地、潮田字下新田、菅沢字道上

大正 5 年に川崎と横浜の境に運河を掘る計画を京浜電気鉄道がたて、許可を得て土地の買収が行われた。運河は完成し工場用地として売却する予定であったが、第一次世界大戦後の不況と重なり売却が進まず、住宅用地として売却することになった。大正 15 年の耕地整理の際に、東京寄り(川崎側)を京町、横浜寄り(鶴見側)を浜町と命名した。横浜の浜町は昭和 2 年に鶴見区平安町と町名を改称した。運河は昭和 16 年に日本鋼管から出た鉾津で埋め立てられた。

^{あさだ}
浅田1～4丁目(昭和 39 年 11 月及び昭和 41 年 3 月住居表示)

浅田町 1～4 丁目(昭和 11 年 3 月耕地整理)

小田字浅間前耕地、潮田字下新田

浅田は小田字浅間前(せんげんまえ)耕地と潮田字下新田が合併して、字名の一字ずつを採って、浅田とした。下新田は昔から小田村とつながりが強く、昭和 11 年の耕地整理で一つの町となった。バス停に浅間前や下新田の名前が残る。

^{たなべしんでん}
田辺新田(昭和 39 年 11 月住居表示) 竹ノ下町(昭和 3 年公有水面埋立地)

田辺新田(大正 13 年設定)

小田字田辺新田、竹ノ下耕地

江戸中期から後期にかけて小田村の旧家の田辺家によって造成されたと伝えられる。現在は富士電機の工場地となっている。

しらいしちょう

白石町(昭和 39 年 11 月住居表示) 白石町(大正 15 年 4 月公有水面埋立地)

小田村地先の田辺新田の先に作られた埋立地。浅野総一郎が手掛けた事業で、白石元治郎の出資協力で完成したところから、白石町とした。日本鑄造や富士電機、ダイエー川崎プロセスセンターなどがある。

おおかわちょう

大川町(昭和 39 年 11 月住居表示) 大川町(大正 15 年 4 月公有水面埋立地)

白石町の南、境運河をはさんで横浜市との境に位置する。浅野総一郎が手掛けた事業で、大川平三郎の出資協力で完成したところから、大川町とした。昭和電工や三菱化工機、日清製粉などの工場が並び、周囲は白石運河、境運河、田辺運河、京浜運河に囲まれる。

おうぎまち

扇町(昭和 40 年 7 月住居表示) 扇町(昭和 3 年 2 月公有水面埋立地)

渡田村地先の若尾新田とその先の海辺にあたり、昭和 2 年に浅野総一郎が手掛けた事業。そのおり、浅野家の家紋の扇にちなんで扇町とした。三井埠頭や昭和電工、昭和シェル石油、JXTG エネルギー川崎事業所、JFE スチール東日本製鉄所がある。

おおぎしま

扇島(昭和 39 年 11 月公有水面埋立地)

東京湾に面した埋立地。北は京浜運河を隔てて扇町に、東は東扇島に接し、扇島の西半分は横浜市鶴見区にあたる。JFE スチール東日本製鉄所、東亜石油備蓄基地、風力発電所、太陽光発電所がある。

ひがしおおぎしま

東扇島(昭和 49 年 11 月公有水面埋立地)

扇島の東に川崎市によって埋立が行われ、東扇島という町名となる。東京電力東扇島火力発電所、東亜石油の他、川崎港として川崎マリエンや海水公園がある。千鳥町から川崎港海底トンネルで結ばれている。

さいわい
幸 区

明治 22 年に市町村制が施行され、御幸村が成立した。合併した村は、南河原村・戸手村・小向村・塚越村・下平間村と現在は中原区になる上平間村・中丸子村である。また同時に日吉村が成立し、鹿島田村・小倉村・南加瀬村と横浜の矢上村・駒林村・箕輪村・駒ヶ橋村が合併してできた。その後、明治 45 年に古市場村が御幸村に編入する。大正 14 年に北加瀬が住吉村から日吉村に編入される。昭和 12 年に日吉村の矢上川以東の矢上村の飛地が川崎市に編入された。昭和 47 年の区制施行により、上平間と中丸子は中原区に所属する。

御幸の名前は明治 13 年に明治天皇が小向梅林に行幸したことにより、合併した村の名を明治天皇所縁の「御幸」とした。また、日吉の村名は駒林の金蔵寺境内の日吉大権現に由来する。日吉地区が横浜と分離しても、日吉地区として行政サービスを行っている。

幸区は川崎区と常に一帯の関係にあった。大正 13 年の川崎市誕生にあたっては、まず川崎町と御幸村によって市制を施行しようとした。これは日常的に南河原や戸手、小向地域との生活圏での行き来が多かったことに由来する。祭礼や冠婚葬祭などでの事例が伝えられている。明治から大正にかけて、工場進出に際し土地取得に関して、耕地整理の必要性が強く打ち出され、そのような気運の中から川崎市が誕生した。

御幸地区において大きな課題となったのが、昭和 4 年に完成した新鶴見操車場である。新鶴見操車場は鹿島田村の中心を抜けて、小倉村と横浜の江ヶ崎村に至る広大な土地である。昔から「鹿島の田」と呼ばれる穀倉地帯でほとんどが田であった。二ヶ領用水が全体に張り巡り、小倉池など水路があるなど、川崎市域においても純農業地帯であった。そこに国から貨物輸送の重要性により、操車場建設が打診され、地権者ははじめは反対し、市議会も反対決議をした。しかし、不景気の中次第に地権者の中から賛成者が出て、新鶴見操車場が完成した。予想した通り町が分断され、操車場の跨線橋を通るか迂回しないと隣接した地域への行き来ができない。しかし、貨物輸送がトラック主体に変化し、鉄道輸送が大幅に減少した。また、国の鉄道民営化への移行に伴い、新鶴見操車場が廃止となった(信号所のみ)。横須賀線が貨物線を利用する新線となり、昭和 55 年に新川崎駅ができ交通アクセスがいくらか便利になり、鹿島田付近の町づくりに変化がでてきた。

新鶴見操車場跡地の再開発が進み、工場跡地を含むタワーマンションやショッピングモール、慶応大学新川崎キャンパスなどの進出により、町名として新川崎、新小倉、新塚越、東小倉などの新町名が発足した。

川崎駅西口の再開発は、多摩川沿いにある明治製糖、明治製菓の移転による、ソリッドスクエア地区の再開発に始まる。次いで東芝堀川町工場に隣接する旧国鉄川崎電力支区や住宅都市整備公団などの団地の跡地にミュージア川崎シンフォニーホールなどが建設された。そして、東芝堀川町工場跡地の再開発計画から川崎駅西口を中心とした周辺再開発が行なわれた。ラゾーナ川崎プラザの建設により市民の動線が大きく変化した。従来のバスターミナルとは別に川崎駅西口北ターミナルの開設により、川崎駅東口のバス発着を大幅に減少し再整理を行った。また、川崎駅北口改札の開設によりさらに川崎駅の東西を結ぶ移動も容易になった。

みなみがわら
【南河原地区】

ほりかわちよう
堀川町(大正 13 年 6 月耕地整理)

堀之内字川下耕地、南河原耕地、南河原字丁居村耕地、戊大宮耕地

堀川町は現在幸区の町名になっているが、当初は大半が川崎町にも堀川町が続いていた。川崎町側が東町(後の本町)や駅前本町となって堀川町の町名が消滅する。

一方、幸区側は明治製糖・明治製菓の工場敷地がほぼ堀川町にあたる。大正 13 年の川崎町の耕地整理の一環として東芝工場敷地を含む地域を堀川町としたというのが経緯である。

堀川町の町名の由来を記したものがいくつかあるが、証言のみで町に堀が流れていたからなど曖昧である。実は、この場所は堀之内村であったことが伝えられていない。堀之内村川下耕地といったのである。そこから堀川の地名が生れるが記録にないため伝えられていない。

みやこちよう
都町(昭和 13 年 8 月耕地整理)

南河原字甲居村耕地

川崎市南河原に新町名が実施されるのが昭和 8 年である。戸手との境界の指定変更を経て実施された。しかし、都町の部分で決着がついていなかった。遅れて 5 年後の昭和 13 年に都町となった。その 5 年間はここだけが南河原であった。居村耕地とは村の中心で人々が多く住む所に付く地名である。村道に沿って集落が並び寺社がある。都町(みやこちよう)の町名の由来は伝えられていない。単に「住めば都」なのか、都(みやこ)という好字を選んだのか知るすべがない。都町にある南河原小学校に南河原の名前が残る。南河原村は古くは六郷領八幡塚村の飛地で、八幡塚村の耕作地があったが次第に土着するものがでてきた。

さいわいちよう
幸町 1~4 丁目(昭和 8 年 4 月耕地整理)

南河原字乙居村耕地、丁居村耕地、戊大宮耕地

昭和 8 年南河原では一部を除き、全てに新町名が付けられた。幸(さいわい)は好字であるが、単に好字というだけでなく、明治 22 年 4 月から大正 13 年 7 月までこの一帯は御幸村と言った。しかも、その御幸は明治天皇が小向梅林に訪れたことに由来する。合併して川崎市になることで御幸を冠にすることがなくなった。そこで、新町名に幸の一字をいただいたのである。幸町は多摩川よりの乙居村耕地、丁居村耕地と女躰神社のある戊大宮耕地にあたる。

なかさいわいちよう
中幸町 1~4 丁目(昭和 8 年 4 月耕地整理)

南河原字乙居村耕地、丁居村耕地、戊大宮耕地

中幸町は幸町と南幸町の中間に位置する。ラゾーナ川崎プラザの北に位置付き、南河原中学校や諏訪公園がある地域。

みなみさいわいちょう

南幸町1～3丁目(昭和8年4月耕地整理)

南河原字甲居村耕地、癸居村耕地、庚大宮耕地、辛荻場耕地、壬荻場耕地

南幸町は南河原の西に位置し、鶴見区矢向に接する。川崎市南部市場がある。荻場耕地と呼ばれ湿地帯が広がっていたという。矢向村の飛地が散在した。

おおみやちょう

大宮町(昭和8年4月耕地整理)

南河原字庚大宮耕地、砂子字南河原耕地

大宮町は字庚大宮耕地から採ったもの。川崎駅西口通りの西側で、旧国鉄の鉄道変電所跡にミュージアム川崎プラザが建つ。

やなぎちょう

柳町(昭和8年4月耕地整理)

砂子字南河原耕地、南河原字庚大宮耕地、辛荻場耕地など

大半が川崎町の南河原耕地であった所。現在はキャノン川崎事業所が建つが、東芝柳町工場があった場所である。この付近は土地が低く二ヶ領用水が集められた遊水地となっていた。通称鶺沼(ばんぬま)と呼ばれ、将軍の鷹場でもあった。柳町の名前は、その湿地のあちこちに柳が生えていたことによる。

【とで戸手地区】

とでほんちょう

戸手本町1～2丁目(昭和26年4月耕地整理)

戸手字本田耕地、西原耕地、西中耕地

戸手本町は戸手村の中心の本田耕地から採ったという。中原町宮内から町営水道を引き、戸手浄水場(現在の幸市民館・図書館の地)で沈殿濾過して川崎町へ通水した場所にあたる。

とで

戸手1～4丁目(昭和51年9月住居表示) 戸手1～2丁目(昭和11年3月耕地整理)

戸手字壬原耕地、辛原耕地、小向字居村耕地、南河原字堤外北耕地

戸手1～2丁目を再編し、住居表示を実施し戸手1～4丁目とした。戸手本町の東に位置し、南河原に接する。原耕地を中心に多摩川に面した地域にあたる。戸手は土手と共通で多摩川の旧堤防が町名の由来と考えられる。小向境に二ヶ領用水大師河原用水が流れる。

えんどうまち

遠藤町(昭和3年5月耕地整理)

戸手字遠藤耕地、下河原耕地

遠藤町は字遠藤耕地に由来する。一時は近くに町役場(戸手2丁目)が設置されたことや御幸小学校があるなど村の中心であった時もあった。現在は国道1号線の脇に位置し、府中街道との交差点があり、多くの車が通過する地点となった。

こんやまち
紺屋町(昭和3年5月耕地整理)

戸手字紺屋橋耕地、遠藤耕地

紺屋町は遠藤町の南に位置し字紺屋橋耕地に由来する。しかし、紺屋も橋の場所もわかっていない。地域に小さな女躰神社がある。また、日蓮宗正教寺と本田地蔵尊がある。

かわはらまち
河原町(昭和3年5月耕地整理)

戸手字下河原耕地、遠藤耕地、辛原耕地、南河原字乙居村耕地、堤外北耕地

河原町。一般には「かわらちょう」と言っている。字下河原耕地に由来する。明治時代にはほとんどが沼地であったため、大正7年に埋立てて日東製鋼川崎工場が完成する。その後大正12年に東京製鋼に買収された。昭和2年に南武線の矢向駅から貨物線が引かれ、多摩川縁に川崎河岸駅ができる。この貨物線は二ヶ領用水の排水路を利用して敷かれたもの。貨物線は昭和45年に廃止され、現在はさいわい緑道として残っている。

しんめいちよう
神明町1~2丁目(昭和3年5月及び13年8月耕地整理)

戸手字紺屋橋耕地、下河原耕地、前通耕地、西中耕地、南河原字甲居村耕地

神明町は戸手村の鎮守で、神明町に隣接していることから町名に採用した。以前は池貝鉄工所神明工場があったが、倒産して廃業し、跡地に市営住宅など多くの住宅地となった。

こむかい
【小向地区】

こむかい
小向(大正13年7月設定)

小向字元割耕地、東割耕地

多摩川の河川敷にあり、川崎競馬場のトレーニングセンターがほとんどを占める。

こむかいちよう
小向町(昭和51年9月住居表示) 小向(昭和27年12月耕地整理)

小向字居村耕地

小向の地名は、東京側(江戸側)から見た地名。字居村耕地は小向の中心で府中街道沿いにある。南端にある妙光寺は田中休愚のゆかりの寺で山号を田中山と号している。妙光寺前から町の中央を通る道は古く、寺の一角は町の古い様子を残している。

こむかいなかのちょう

小向仲野町(昭和 51 年 9 月住居表示) 小向仲野町(昭和 27 年 12 月耕地整理)

小向字仲野耕地、荒久耕地、茶ノ木耕地、茅野耕地、戸手字癸離河原耕地、古市場字下耕地

小向仲野町は字仲野耕地に由来する。仲野は中野で開発の遅れた野原の地名。荒久・茶ノ木・茅野の同様の意味。川が大きく曲がる位置にあり、上流で削られた土が河原に堆積している。

こむかいとうしばちょう

小向東芝町(昭和 27 年 12 月耕地整理)

小向字宮前耕地、中原耕地、荒久耕地、戸手字癸離河原耕地、古市場字上台耕地、下河原耕地、下平間字池淵耕地

小向東芝町は小向字宮前耕地、中原耕地、荒久耕地を中心に周辺の地域の一部を編入して構成されている。昭和 27 年に耕地整理が行われ、東芝の工場敷地であるところから、小向を冠に東芝町とした。企業名を町名とした。東芝小向工場は昭和 12 年に操業を開始している。

こむかいにしまち

小向西町1~4 丁目(昭和 29 年 12 月区画整理)

小向字宮ノ浦耕地

小向西町は小向町の西に位置するところからの町名。地域内に八幡神社があり、宮ノ浦(宮ノ裏)耕地と呼ばれた。小向町との境に二ヶ領用水大師河原堀が流れていた。

ふるいちば

【古市場地区】

ふるいちば

古市場(大正 13 年 7 月設定)

古市場字下河原耕地

古市場は江戸側(東京側)にあったが、川の流路が変わり多摩川により村が分断され南に古市場村の一部があった。明治 45 年に東京府と神奈川県境界を多摩川を境とすることが決定され、川崎市古市場となった。古市場の年代は特定できないが中世にはあったことがわかっている。多摩川の渡し場付近に市場が発生したことが、大田区多摩川の天応寺の碑に記されている。

ふるいちば

古市場1~2 丁目(昭和 23 年 5 月区画整理)

古市場字重枚通り耕地、中洲耕地

旧多摩川堤防に囲まれた地域で、字重枚や中洲など川の流れによって運ばれた土で耕作地が作られたことによる。現在の道路はほとんどが新しくできた道。

ひがしふるいちば

東古市場(昭和 27 年 12 月耕地整理)

古市場字上台耕地、下河原耕地、小向字荒久耕地

古市場と小向からなり、上台(かみだい)の名の通り古市場の中で最も高い位置にある。河川敷にあった天満天神社がながされたため現在地に遷座した。荒久耕地に御幸公園がある。

ふるかわ つかごし

【古川・塚越地区】

ふるかわまち

古川町(昭和 26 年 4 月耕地整理)

古川字西耕地、東耕地、池田耕地

古川町の町名は、旧多摩川の流路跡の付いた地名である。古川町の沿って通る道は通称馬絹道(川崎道)と呼ばれ、その道に沿って二ヶ領用水大師河原用水が流れていました。東西に細長く西耕地と東耕地に二分され、街道の北側の低地を池田耕地が細長く続いている。そこに、二ヶ領用水から分水したオトシボリが通っていた。

つかごし

塚越1～4丁目(昭和 26 年 4 月耕地整理)

塚越字袋、沼ノ上、前原、矢通り、新田川渕

塚越は村内にあった塚(古墳)に由来する。伝聞では昔、矢口の渡しの合戦で、矢を射たところ塚を越えて矢通り付近にまで届いたというものである。矢は谷地(やち)で湿地のこと。字袋は流路が袋状になった地形。

しんつかごし

新塚越(平成 12 年起立)

塚越字袋、鹿島田字向嶋、小倉字北耕地、下平間字宮前耕地

鹿島田駅に接して、従来塚越と呼んでいた地域で東芝ダイカストの跡地にマンション群(サウザンドシティ)が建ち、新町名として新塚越とした。四つの村の交点に位置していた。平成 16 年に下平間の一部が編入され、現在の地域となる。

かしまだ おぐら

【鹿島田・小倉地区】

しもひらま

下平間(大正 13 年 7 月設定)

下平間字稲荷耕地、宮前耕地、池渕耕地

上平間村と下平間村は一つの村(平間郷)であったが、江戸の初期に上・下に分かれたと思われる。多摩川と加瀬山の間を開けた平地であったところから「平間」と呼ばれていたという。二ヶ領用水大師河原用水やその分水が村のいたるところを流れていた。

^{かしまだ}
鹿島田1～3丁目(平成24年11月住居表示)

鹿島田字宮城野、田尻、中村、上通、川向、関面、向島、西耕地、小倉字北耕地、下平間稲荷耕地、市ノ坪字新田

鹿島田村は大村であったが、新鶴見操車場が昭和4年に完成して町を分断された。現在は中原区になる大倉町も鹿島田であった。「鹿島の田」と呼ばれ、穀倉地帯であった。村社鹿島神社の神田であったところからの由来。

^{しんかわさき}
新川崎(平成19年12月住居表示)

鹿島田字宮城野、向耕地、中村、上通、下田向、西耕地、関面、小倉字居村耕地、北耕地、北加瀬字山崎、八ノ沼

横須賀線の南に位置し、旧鶴見操車場に沿う民有地に付いた町名。新川崎駅から鹿島田跨線橋を渡って左右に町が細長く広がっている。商業施設や慶應義塾大学新川崎タウンキャンパスがある。

^{おぐら}
小倉(大正13年7月設定)

小倉字北耕地、居村、東耕地

マンション群(パークシティ新川崎)にあたり、住居表示未実施の地域。

^{おぐら}
小倉1～5丁目(平成23年10月及び11月住居表示)

小倉字居村、東耕地、南耕地、北耕地

小倉は鹿島田に続く穀倉地帯で、米の集散地であったのではないかと。鶴見川の河岸から搬出したか。江戸時代には南加瀬の河岸から年貢を津出ししている。二ヶ領用水の末端に小倉池があり、現在の小倉緑道の付近にあたる。

^{ひがしおぐら}
東小倉(平成20年12月住居表示)

小倉字北耕地、居村、東耕地

南武線と横須賀線の間には挟まれた地域。東小倉小学校から塚越3丁目にかけての地域で、従来から東耕地と呼ばれていた地域を中心に住居表示がなされた。

^{しんおぐら}
新小倉1～2丁目(平成19年12月住居表示)

小倉字東耕地、居村耕地

横須賀線の南に細長く位置付く。小倉3・4丁目に接した、新鶴見操車場跡地の再開発によって生まれた地。小倉跨線橋が架かり、南北をつなぐ。

【^{かせ}加瀬地区】

^{みなみかせ}南加瀬1～5丁目(昭和60年11月住居表示)

南加瀬字東町、夢見ヶ崎、仲山、池附、五反町、越路、砂場、仲町、原町、江川、新田、下ノ町、榎戸、岩瀬、辻、道下、ドブ、北加瀬字熊野台、出口、矢上字三軒屋、袋河岸

南加瀬(みなみかせ)は加瀬山の南面から鶴見川にかけての地域。鶴見川の支流矢上川にも接しており、鶴見川を利用した水運がこの付近まで上ってきたという。馬絹道と呼ばれる道があり、川崎方面や平間を經由して江戸に向う要路でもあった。

^{きたかせ}北加瀬1～3丁目(平成2年2月住居表示)

北加瀬字北ノ根、熊野台、山崎、八ノ沼、出口、耕地、道上、原、矢上字橋向

北加瀬は加瀬山の北面、夢見ヶ崎公園のほとんどが北加瀬にあたる。一時期は住吉村に所属していたが、住吉村が中原町として編入する際に、日吉村に編入した。また、区制施行にあたり、北加瀬の一部が中原区に編入し西加瀬となった。現在、幸区役所日吉出張所が北加瀬にある。

^{やがみ}矢上(平成2年2月住居表示)

矢上字橋向、北加瀬字久保、原

旧日吉村の横浜市域にも矢上があった。矢上川の川崎側の飛地が川崎市に編入された。北加瀬の西側の矢上川に沿った地域。横浜市の飛地と北加瀬の一部が住居表示により、矢上となった。横浜市域の矢上は旧日吉村の村役場のあったところで、日吉が横浜市港北区になる時に、川崎市と分かれた。現在は日吉3丁目となり、横浜市には矢上の地名はない。

幸区域字図比較

『川崎の町名』に掲載した「幸区 字図」平成3年(1991年)版



『川崎市 川崎区・幸区の町名の移り変わり』(本報告書)

「幸区 字図」令和元年(2019年)版



まとめ

川崎区と幸区の町名・地名について大正期の第一期の町名改正、昭和期の耕地整理事業及び戦後の動乱期を経ての町名再編などの経過を記した。

川崎区域は早い時期から新町名を実施しており、それも旧村名や字名を基本とした町名が多い。住居表示法施行により、町名がブロック化され、町域は変更されたが大きな変更がなかったため住民としては違和感がなかったように思われる。

講演会及び町歩きでは「川崎駅の西・東」として、川崎区域が大正期から順次に拡大する港湾部への道路建設と関連する町づくりを中心に、幸区区域では南河原の新町名の成立過程や隣接する戸手、小向との関係を、また、新鶴見操車場の再開発と新川崎駅周辺の町の移り変わりを中心に報告した。

町歩き①の「市役所通りは復興道路、新川を暗渠に」で、稲毛神社境内にある諸社の存在する意味、石碑などに刻まれて旧町名や人名などから村の記録を知ることができることを知らせた。榎町(蒲原耕地)の由来と、住居表示施行により町域の変化を実感することができた。妙遠寺では、戦後の復興事業により移転してきたことや二ヶ領用水に関連する小泉次大夫・田中休愚に関する「泉田二君水恩碑」や墓碑を見て、文化財の意味を知るなど、身近な地域からその歴史や文化、地名について学ぶことができた。

町歩き②の「南河原の町名は消えても！」で、ラゾーナ川崎の施設内に残る工場遺物を確認した。その後、旧地形などを知る手がかりに諏訪神社跡や居村耕地を訪ねた。延命寺では川崎市内で数少ない戦災記録としての供養墓碑を見学することができた。また、多摩川の沿って二ヶ領用水路が地域を巡っていることがわかる「庚申堂」を見学し、そこに記されている内容を知り、用水と石橋や道標など昔の村の姿を知る手がかりを学ぶことができた。

川崎区域の町名はその多くが、字名をもとに発生し、時代を経る中で地域密着の名称に変更した例が多いように思われる。また、埋立地の町名については、開発者や企業創業者の名前をとった例が多く見られる。

幸区域の町名は南河原を除くと、旧村名が基本的に継承されている。一部に字名の町名がある。多摩川と二ヶ領用水による地形が特徴で、町名・地名にその由来が反映されている。南河原は昭和の前期には町名としては存在していないが、幸町(幸町・中幸町・南幸町)がその代名詞となっており、住民の中には南河原の意識は強く残っているように思われる。その中でラゾーナ川崎一帯(川崎駅西口)が別格の町を形成している。

川崎市役所本庁舎の新規建設に伴い、旧庁舎が完全に取り壊された。大正13年(1924)からこの場所で川崎市の行政の中心を担ってきた。150万人を超える市民を擁し、まもなく川崎市制100年を迎えるにあたり、川崎市の文化・歴史に根ざした町名・地名の重要性を伝えていきたい。

地名講座「川崎駅の西・東」 ～変わる町と昔のしるべ～

2019年12月7日(土) 東海道かわさき宿交流館 集会室 午後2時～

2019年12月15日(日) ミューザ川崎シンフォニーホール 研修室 午後2時～

1、川崎駅は川崎区か、幸区か

- ・現在の川崎駅の行政区画図を見ると、東京寄りは幸区、横浜寄りは川崎区である。
川崎駅の現住所は二つ 川崎区駅前本町 26-1。アトレ川崎
もう一つが 幸区堀川町 72-1。ラゾーナ川崎プラザどちらも商業施設。
- ・建設当初の行政区画図を見ると、複雑に入り組んでいることがわかる。
大正8年 川崎町図
昭和47年以降 構内図に残る字名
- ・川崎町、堀之内村、南河原村の存在
- ・川崎ステーションのメインストリートは京急川崎駅前の道。府中街道の起点。

1	南河原字 ^{マカ} 大宮耕地	30	} 63
2	南河原字 ^{マカ} 大宮耕地	1	
3	南河原字砂子下耕地	30	
4	南河原字下居村	2	} 54
5	堀ノ内字南河原耕地	54	
6	砂子字南河原耕地	22	} 124
7	砂子字古川通耕地	102	
8	新宿字南河原耕地	5	
9	新宿字古川通耕地	5	} 15
10	新宿字宿裏耕地	5	
11	川崎市川崎区日進町	1	1 既石所器17
12	川崎市古川通	28	28
13	川崎市堀根	1	1
14	川崎市幸区大宮町	1	1
15	川崎市幸区堀川町	8	8
		295 - 28 = 267	
		295 第	

(片面図紙) 川 崎 市 B5 上45 53 2 100×2000 (期)

2、駅前から東(臨海部)へ延びる道

・新川通

新川は1933年(昭和8年)ころから、区画整理事業に伴って暗渠となり、道路の下を新川が流れていた。1935年(昭和10年)頃には完全に暗渠になってしまった。川崎区域の道は、東海道や大師道を除くと旧村の道によってつながっており、臨海部に出るにはそれらの道を効率よく歩くしか方法がなかった。

川崎市では、工場従業員の輸送を大師線と鶴見臨海鉄道をつないで運ぶことにした。しかし、自動車輸送(原材料・製品出荷など)の時代を迎え、新川通を完成させた。

・市電通り

1943年(昭和18年)、市内交通問題懇談会が、工場従業員の輸送力増強のため市電の敷設要望書を市に提出。認可され、渡田に道路地を確保した。翌昭和19年10月市電の運転営業を開始する。1969年(昭和44年)3月バス輸送に方針を転換し、25年間で幕を閉じる。その後、鉄路は撤去され自動車道路として整備される。

・市役所通り

1945年(昭和20年)4月15日の川崎大空襲で市内の中心部はほとんどが被災した。翌昭和21年本市の戦災復興土地区画整理・用途地域・街路計画・公園計画が決定する。昭和25年に市役所通りが完成し、市バスの運行やトロリーバス(昭和26年)の営業が始まる。

3、土地区画整理事業

- ・明治時代の村
- ・川崎市の初めのころ
- ・第一次土地区画整理
- ・戦災復興計画
- ・住居表示法

川崎区幸区域の耕地整理事業組合の推移年表

明治42年	1909年	耕地整理法を制定
大正6年	1917年	川崎町第一耕地整理組合(完了大正12年)宮前・下蒲原・東田・貝塚・古屋敷・元木・見染・東越・向耕地の一部。追加、池田・南河原・古川通・堤根・西原・下宅地
大正8年	1919年	都市計画法を制定
大正8年	1919年	田島村第一耕地整理組合
大正9年	1920年	川崎町第二耕地整理組合(完了大正11年)南河原・南河原砂子下・東田・古川通・堤根
大正10年	1921年	御幸耕地整理組合(完了昭和17年)
大正11年	1922年	川崎町第三耕地整理組合(完了大正14年)
大正13年	1924年	田島村第二耕地整理組合(完了昭和16年)

大正13年	1924年	川崎市川崎町第四耕地整理組合(完了年不明)旧川崎町久根崎・中島・大島
大正14年	1925年	川崎市大師河原第一耕地整理組合
大正14年	1925年	田島町堤外耕地整理組合
大正15年	1926年	川崎市田島町大島耕地整理組合(完了昭和3年)大島向耕地・中島・新宿
大正15年	1926年	川崎市大師河原第二耕地整理組合(完了昭和9年)
大正15年	1926年	川崎市大師河原第三耕地整理組合(完了昭和10年)
大正15年	1926年	川崎市域の震災復興に向けた都市計画
昭和2年	1927年	大島地区耕地整理組合～6年(舗装は30年代)
昭和3年	1928年	塚越古川戸手耕地整理組合 戸手耕地整理組合
昭和3年	1928年	(川崎市御幸耕地整理組合第一区)遠藤町・紺屋町・河原町・神明町1丁目耕地整理
昭和4年	1929年	渡田塩浜耕地整理組合
昭和4年	1929年	塚越耕地整理組合
昭和5年	1930年	森山・森山下耕地整理組合
昭和8年	1933年	耕地整理法を改正
昭和8年	1933年	田島森山下土地区画整理事業(浜町三丁目地内)が認可される。県営京浜工業地帯造成事業の起工式が行われる。
昭和8年	1933年	(川崎市御幸耕地整理組合第三区)南河原地区耕地整理完了と新町名
昭和12年	1937年	川崎都市計画大師臨港地帯土地区画整理事業第一工区～第七工区。最終完了昭和44年。
昭和13年	1938年	川崎駅前広場拡張工事が竣工する。
昭和13年	1938年	戸手1・2丁目・神明町2丁目耕地整理(昭和11年変更)
昭和15年	1940年	川崎駅東口附近土地区画整理事業が認可される。
昭和17年	1942年	大師臨港地帯土地区画整理事務所が大師河原出来野に竣工する。
昭和20年	1945年	京浜工業地帯造成事業の廃止が決まる。
昭和21年	1946年	川崎都市計画復興土地区画整理事業第一工区～第六工区。最終完了昭和48年。
昭和21年	1946年	戦災復興計画による第一京浜国道の幅員(50m)の整備。
昭和23年	1948年	古市場土地区画整理事業(一人施行)が完了する。
昭和24年	1949年	古川を暗渠にして、川崎銀柳街が誕生する。
昭和26年	1951年	塚越・古川・戸手本町耕地整理
昭和28年	1953年	小向土地区画整理事業(組合)が完了する。
昭和30年	1955年	小向第二土地区画整理事業(組合)が完了する。

4、昔のしるべ(詳しくは町歩きで)

- ・稲毛神社
- ・妙遠寺の旧地
- ・道しるべ、庚申堂
- ・延命寺の戦災殉難者群霊の供養碑
- ・明治天皇御幸之碑
- ・女躰神社と合祀された神社



5、南河原の町名は昭和 13 年に消滅

- ・南河原の地名の由来

南河原村の形から、旧多摩川が村の南を流れていたことが分かる。

資料によると荏原郡八幡塚村に属し、出耕作地(飛地)であったという。

南に広がる河川敷であったところから、南河原と呼ばれ、『小田原衆所領役帳』に村の名が出てくる。

- ・町名変更の気運(新しい町づくり)

堀川町は川崎町の新町名移行に伴い、大正 13 年 6 月に誕生。

昭和 3 年に戸手の耕地整理が行われ、遠藤町・紺屋町・河原町・神明町が先に誕生する。

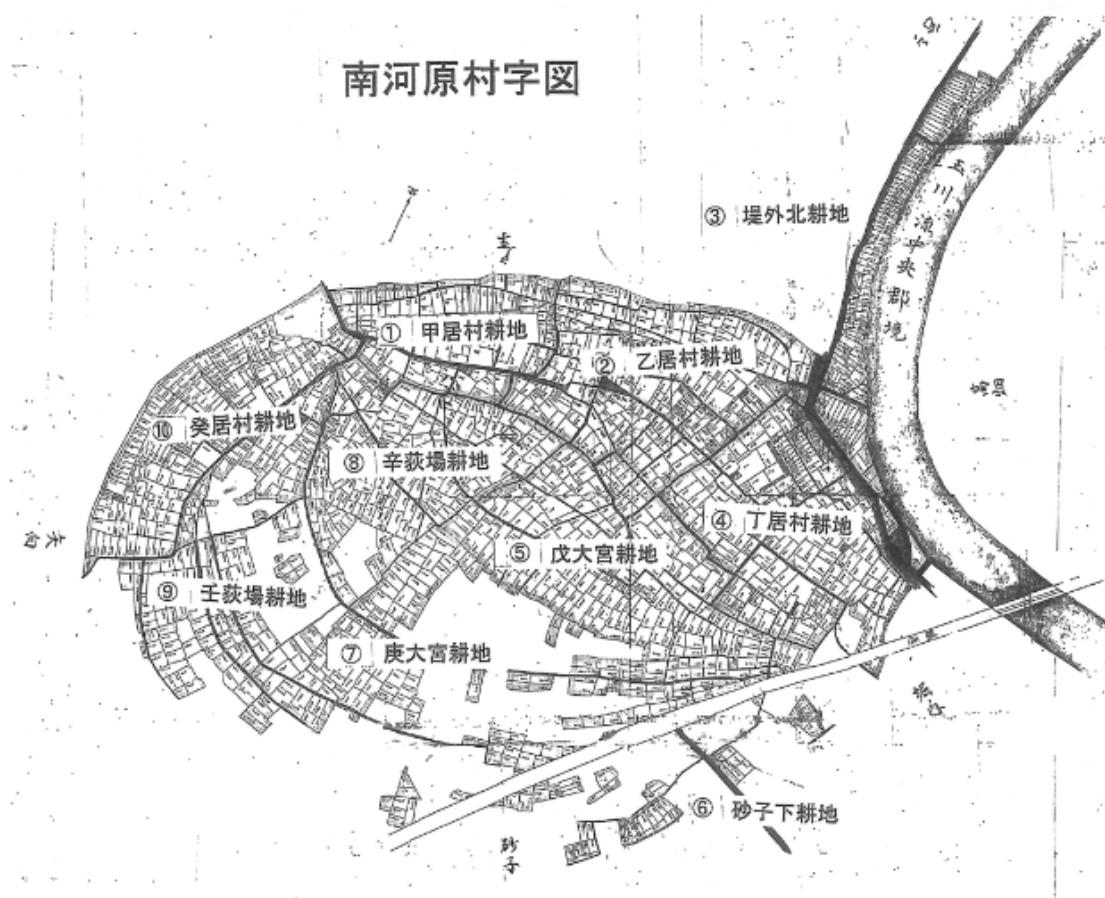
これにならって南河原の耕地整理が行われ、昭和 8 年 4 月に幸町・中幸町・南幸町・柳町・大宮町が誕生する。最後まで残っていた地域が都町となって、昭和 13 年 8 月に南河原の地名が消滅した。また、川崎町の一部に堀川町が残っており、昭和 39 年に駅前本町としてなった。戸手は戸手・戸手本町が誕生して、戸手の地名は残った。

・早いもの勝ち

本来、御幸の地は小向梅林付近を指すと考える。御幸公園にある「御幸之碑」が物語る。小向は昭和 27 年になってから耕地整理で町名変更が行われ、冠に小向が付いている。

・なぜ南河原の地名が消えてしまったのか

現在の柳町周辺に川崎町(久根崎・新宿・砂子・小土呂)及び堀之内の字南河原耕地が複雑に入り組んでいた。特に、新宿と砂子の土地が多かった。地主にとって、川崎町の南河原耕地なのか。御幸村の南河原なのか。混乱していたことが記録に残っている。南河原村の字名の付け方に、南河原を残そうという考えがなかったように思える。南河原小学校、南河原老人いこいの家などの名前が残る。



・南河原村の字名と現在の町名比較

甲居村耕地：都町、南幸町 1 丁目の一部、神明町 2 丁目の一部

乙居村耕地：中幸町 1・2 丁目の一部、幸町 3 丁目の一部、河原町の一部

(丙)堤外北耕地：河原町の一部、戸手 4 丁目の一部、幸町 2・3 丁目の一部

丁居村耕地：幸町 1~4 丁目、堀川町の一部

戊大宮耕地：幸町 1・4 丁目の一部、東芝堀川町工場、中幸町 3・4 丁目一部、大宮町の一部

砂子下耕地：砂子町の一部、日進町の一部

庚大宮耕地：大宮町、南幸町 2 丁目、南幸町 1 丁目の一部、柳町の一部

辛荻場耕地：南幸町 3 丁目の一部、柳町の一部、矢向飛地

壬荻場耕地：南幸町 3 丁目の一部、柳町の一部、矢向飛地

癸居村耕地：南幸町 3 丁目の一部、神明町 2 丁目の一部

6、東芝堀川町工場

- ・明治 40 年(1907 年)5 月御幸村南河原に 9 万 3 千㎡(2 万 8 千坪)を取得。
41 年操業開始。ソケット・変圧器・タングステン電球・ガラス工場として。
- ・明治 43 年の大洪水で工場敷地や住宅などがすべて冠水する。
『東芝百年史』(昭和 52 年 3 月発行)には、生見尾村(鶴見)の糟山を買取り、軽便鉄道を敷設して、大土盛工事を行ったと載る。
『幸区地誌』(平成元年 7 月発行)にも、「明治 43 年の大洪水で工場敷地が決壊した川崎駅西口の東京電気では、地元有志の協力もあって、御幸村の加瀬山南東端の部分を買収し、丘を崩して土砂をトロッコで運搬した」とある。
時期は少しずれるかもしれないが、小向の多摩川の旧土手と二ヶ領用水の土手が、古市場への往来に不便であったこともあって、その堤防を削った土砂を南河原の土地の低いところに、やはりトロッコで運んだと証言している。
- ・「マツダランプ」が日本中を照らした。
マツダの名前は、アメリカ合衆国の白熱電球のブランド名。ゾロアスター教の最高神アフラ・マズダーに由来。
- ・東芝本社工場の時代(2013 年～)

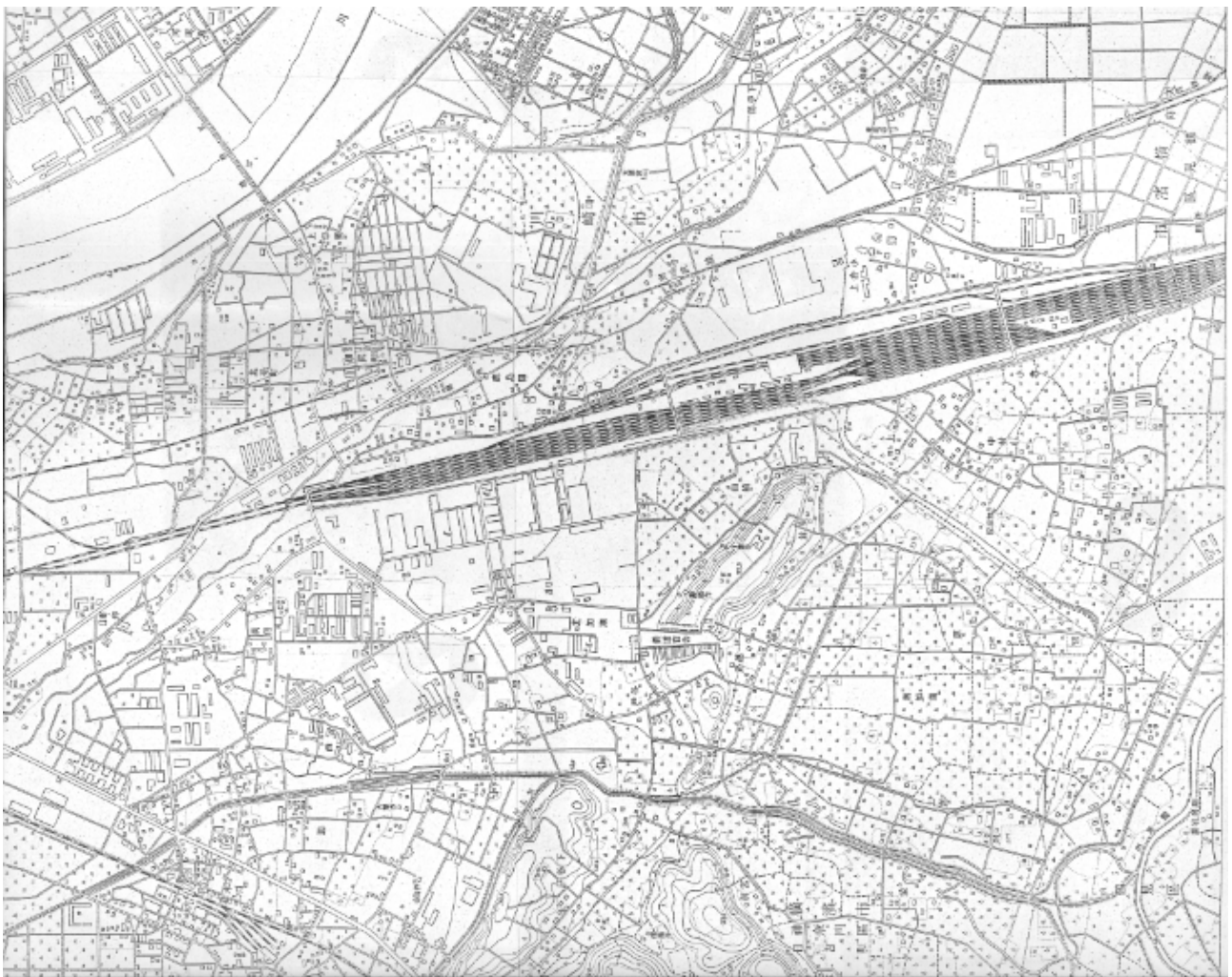
7、川崎駅西口の再開発の目玉

- ・交通アクセス
- ・ラゾーナ川崎プラザ
- ・東芝未来科学館
- ・ミュージア川崎シンフォニーホール
- ・キャノン川崎事業所(東芝柳町工場跡)
- ・ホテルメトロポリタン川崎 2020 年 5 月開業予定

8、鹿島田と新川崎(新鶴見操車場跡地)

・新鶴見操車場は全長 5.2 km、面積 24 万坪(約 80ha)にも及ぶ。幸区の面積の約 8% に当たる。北から中原区境の御幸跨線橋、鹿島田跨線橋、小倉跨線橋、江ヶ崎跨線橋、そして横浜市鶴見区に矢向跨線橋と五つの跨線橋で両方の地域が結ばれている。操車場跡地の再利用計画が、それぞれの跨線橋の両側で行われ、特に鹿島田跨線橋付近は新川崎地区として商業施設や産学連携の慶応義塾大学新川崎タウンキャンパス(K₂タウンキャンパス)などの取組みがある。

昭和 10 年ころの新鶴見操車場付近



地名講座「川崎駅の西・東」～変わる町と昔のしるべ～

まち歩き 2019年12月14日(土) 午後2時 川崎駅北口集合

「市役所通りは復興道路、新川を暗渠に」

～礎石や道標、伝承などから町の移り変わりを知ろう～

- ① 稲毛神社 山王社(山王様)。8月1～3日「山王祭」。古式宮座式(各村代表者による)。堀之内村にあり、川崎宿、渡田、大島、川中島、稲荷新田等の鎮守。大正13年に合祀したというが、大正2年以前と思われる。地域内の記念物が境内に多くある。
- ② 榎町 下蒲原耕地を中心に、下宅地、古屋敷耕地の一部からなる。榎は湿地を好む。蒲はガマである。町名の由来に、稲毛山王社の祭礼のとき、御輿がこの土地にはまってしまう、引き上げることができなかつたので、一本の榎を植えて、社を建て、神の御霊を鎮めたことによるといわれる。現在も小さな祠がある。
- ③ 妙遠寺 日蓮宗の寺。二ヶ領用水奉行の小泉次大夫が小杉村の陣屋(妙泉寺)から移り、妙遠寺を建てた。以前は川崎市役所第二庁舎付近にあったが、市役所通りの建設のため、昭和25年ころに現在地に移転した。境内には「泉田二君の碑」がある他、小泉次大夫夫妻の墓や家臣の墓がある。
- ④ 境町 東ノ越耕地(東腰耕地)。トウノコシと呼ぶ。新宿や砂子と土地が多くあり、堀之内、大島、中島の飛地が散在する。川崎町と渡田村、大島村、中島村の村境に位置する。これがトウノコシの由来。境町(さかいまち)の由来も同じ意味。今年の8月に住民の要望を受けて、境町をサカイチョウと呼称することが決定した。
- ⑤ さつき橋 大島と渡田の境に位置し、主要な村道が通っている。新川に架かる橋で橋の名前の由来が解らない。多分瑞祥・好字を当てたとと思われる。今は暗渠になって新川通となる。
- ⑥ 新川橋 新川は旧多摩川の古川が川崎町に流れていた。町が洪水でたびたび被害に遭い。そこで、1650年(慶安3年)に堀を掘って直接海に放水することにした。

昭和 8 年ころから新川を暗渠にして道路にした。新川といっても 350 年以上前の命名である。現在の国道 15 号線付近に架かっていた橋の名前。

- ⑦ 川崎駅東口 小川町は古川の流れて、銀柳街商店街のアーケードの下を流れる。
ルフロンは昭和電線電纜の工場跡地にできた商業施設。
川崎駅地下街「アゼリア」。



地名講座「川崎駅の西・東」～変わる町と昔のしるべ～

まち歩き 2019年12月22日(日) 午後2時 川崎駅北口集合

「南河原の町名は消えても！」

～幸の付く町名や堀川町・大宮町の意味を知ろう～

- ① 東芝堀川町工場跡地 明治41年(1908年)に操業開始。平成18年(2000年)に閉鎖。一部事業体を残す。東芝未来科学館を併設。他は複合商業施設、ラゾーナ川崎プラザ。
- ② 諏訪公園 かつてここに諏訪神社があった。信州の諏訪大社を勧請したという。この付近は原辻子(ハラズシ)呼ばれ集落の中心であったところ。諏訪神社は昭和36年に女躰神社に合祀されたという。
- ③ 延命寺 新義真言宗延命寺。宝蔵院とも呼ばれた。甲居村耕地にあり、古くから人々が集落をつくっていた。ここに戦災殉難者群霊の供養碑がある。近くにロータリーと呼ばれる広い道路が交差する地点で、空襲により多くの命が絶たれた。200体とも言われる死骸は近くのお風呂屋の釜で茶毘にして、延命寺で供養したという。川崎市域には戦災供養塔は3ヶ所しかなく、その一つである。
- ④ 庚申堂 庚申堂の敷地にある石碑や敷石から読み解く。その一つが「出羽三山供養塔」文化4年。道標を兼ねる「右 やぐちみち、左 川さきみち」
- ⑤ 明治天皇御幸之碑 明治17年3月に明治天皇が小向梅林を訪れたことを記念して建てた碑。明治22年の御幸村誕生の根拠となる。記念碑で、後に御幸公園内に記念碑が建つ。
- ⑥ 女躰神社 祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命とする。多賀・氷川神社系の神社。伝説に「戦国時代のころ、当村は度々の多摩川氾濫の被害を受け、村民一同困窮していたが、ある時一人の女丈夫が身を犠牲にして村を守ろうと決心し、川に身を投じたという。それ以降洪水による大きな災害はなくなったという。村民はその女性の徳をたたえ霊を祀るため、河端に小祠を建てたのが社の起源という。」



広域避難所		
名称	索引	
多摩川河川敷	—	
御幸公園	H-2	

(お知らせ)
 平成19年度から平成20年度
 用できません。
 更に、平成21年度には、旧
 所として使用することができ

④庚申堂

⑤明治天皇御幸之碑

③延命寺

⑥女躰神社

①東芝堀川町工場跡地

②諏訪公園